五日制で忙しさに追われる学校

上杉俊孝

中学校でも四月から五日制がはじまった。土曜日の半日がなくなるだけで学校はこんなにも日程がびっしり、ゆとりはなくなってしまうものだろうか。予想をはるかに上まわる忙しさである。土曜日の午後にやっていたものが毎日の放課後にしわよせられてきた。特に金曜日の夜に圧迫されてきている。

さらに忙しさに輪をかけているのが指導要領が今年から変わったことである。教育課程が大幅に変えられたことへの対応も大変なものがある。具体的にみてみよう。

第一

一日六限の日が週三日。五限の日は二日。全校のスケジュールが終わる「終わりの会」で三時三〇分。それから何人かの生徒への個人的な指導。諸々の放課後活動に入る。教師の会議や打ち合わせは全員が集まれるのは四時〜四時三〇分で当然あっという間に五時をすぎてしまう。主任、担当があやまりながらも延長せざるを得ない。会議、打ち合わせが終わるとそそくさと部活指導や生徒会の役員会、委員会にと居残り生徒の指導（というか後始末の点検）。それが終わってようやく自分の校務分掌の仕事（雑務と呼ばれるものも

ある）に教材研究。七時～八時になっても多くの教師は残って仕事をしないと終わらないのである。もう学校でできない人は家に持って帰ってやることになる。

第二

「少人数授業」「総合的学習」「選択授業」が入ってきたこと。学校内で工夫できるとはいってもそのために特別教師をふやすことも予算を多くするわけでもない。

① 少人数授業は「英語」と「数学」で二クラスを三つに分ける。三クラスを四つに分ける。同時間に一斉にやる。進度も打ち合わせる。そのためのクラス分けをしなければならない。

② 総合的学習（週二時間）。学校によって「テーマ」は自由。学校の創造性が発揮できる利点はあるが、現実には「何をテーマにするか」「どのようにとりくむか」「年間指導計画」「一時間の指導内容」「予算」「場所」「生徒のクラス分け」等々問題は山積みしている。「時間表では全校一斉」か「学年一斉」でやることになる。

③ 選択教科は「国・社・数・理・英」→週二時間Aコース、Bコース、そして、その中で社会科は二つの講座（課題と補充）というようになり生徒の人数は少なくなるけれど先生方は多くいる。（一斉に）もう一つは「技家、保体、音、美」も同じ様にいくつかのコースに分けて授業が行われる。ここでもテーマ、指導計画、授業内容、予算、場所、生徒のクラス分け等々の問題が生じる。さらに、選択は学期ごとに変えるし、生徒のメンバーも変わる。希望をとり人数調整はなかなか大変。

ここでさらに大変なのが時間表づくりだ。「一斉」に取り組むことが多くなってどうにも動かしにくい。又先生方は休めない。自由がきかない。三つ目に生徒の所属意識が弱くなる。四つ目に学級担任として生徒をつかみにくい。自分がぜんぜん授業にかかわらない生徒がいる場合もでてくる。五つ目、基礎的な学力がつきにくい。例えば中三社会では一斉授業は週二時間しかない。これでどうして基礎学力が本当につくのか、という疑問がいつもある。進度もなかなかすすまず教師はあせりがでて横道にそれた面白みのある授業がとてもできにくい。

第三

今年から「評価」のしかたを相対評価から絶対評価に変えた。通知表の中身を変えたことである。絶対評価は人数が決まっていないから、全員が力をつければどんどん評価を上げることはできるという生徒にとってははげみになる評価方法であると思うが……。現実には教師にとってなかなかきびしいものがある。まず基準づくりが大変。定期テストの結果だけではない。授業の時、ノート（レポート）等を総合してつけなければならない。観点も点数化しなければならない。関心・意欲・態度、思考判断、資料活用、知識理解など、どうつけたらいいか。一斉授業、選択、総合でも評価しなければならない。ところが高校入試では今までと同じく「相対評価の10段階」にするということで、又々大きな問題になるのである。複数の教師で担当する場合には調整も?。こんな所で時間はとられるのである。さらに生徒のやる気をひき出すため「評価カード」をもちいてどこまでわかったか「自己評価」させている。

第四

「学級」の取り組みがすごく多い。「学級」という意識、時間は弱められているが、学級でやることは非常に多い。だから、朝の会、昼休み、終りの会、学級活動、道徳の時間はすることがいっぱい。まったく息をつく暇がない。

① 一学期の取り組みでみると、四月のはじめは学級、生徒会の諸々の組織づくり、学級集団をしっかりつくりたい時である。そこに少人数授業、選択授業、総合的学習のクラス編成のメンバー決め。希望とり、集約、調整、発表、説明等々。

五月は修学旅行（一、二年生も）の下調べ等々、生徒総会、教育相談。

六月は体育大会、全校一斉奉仕活動（生徒中心に計画、学年ごとに大変な準備）、期末テスト、教育実習生の指導、総合的学習の発表（学年、全校）。

七月から秋の体育祭の準備はじまる。保護者会、通知表つけ（今年は大変）。七月二四日の終業式に間に合わせるのに当日朝二時とか三時終了とい

う教師が何人もいた。

② 日々の諸々の取り組み

ア．提出物が非常に多い。アンケート（校内、市教委、県教委、ＰＴＡからのもの）。

イ．セミナー学習。

ウ．諸々の注意すること（生活に関すること）。

エ．進路に関すること、健康指導、エイズ、ジェンダー、行事（生徒会、学年、学級）、読書等々。

第五

生徒の問題行動に対する指導。先生方が生徒とじっくりつきあえない時には、応々にして小さな問題がちょいちょいおきる。ものがなくなる。校舎のどこかに落書き、穴をあける（けっぱる、棒でたたく等）。そうなると丁寧な指導をするには時間がかかる。又、空き時間は校内巡視、生徒の話をきく、家庭との連絡等々。ゆとりのない中でさきのような事件が入ってくると、臨時の学年打ち合わせ、担当の仕事でその日のスケジュールは狂ってしまう。

第六

教師の本業、教材研究は？。今年度は教科書が変わり、時数が減った。選択授業、少人数授業、総合的学習等々で時間は必要。しかし、勤務時間の中ではほとんどやれない状態である。

Ａ先生は選択理科で毎週確実にある、週一時間のための教材研究だけでもどうするか、材料は学校内にないし……。

Ｂ先生は社会科で選択では生徒はなかなか本気にならないし、一斉の総合授業では時数が減って学力をつけるのがむずかしい、辞めたくなった、と嘆いていた。

（うえすぎ　としたか・松浜中学校）